

論文内容の要旨

報告番号		氏名	井上和也
Suprascapular notch variations: a 3DCT study 肩甲切痕のバリエーション-3DCTによる検討-			

論文内容の要旨

【はじめに】肩甲上神経の肩甲切痕での絞扼性障害は 1959 年に初めて報告され、外科的加療として直視下または最近では鏡視下に上肩甲横靭帯切離術の報告が散見される。また肩甲切痕形態のバリエーションについての報告も散見されるが、ほとんどが屍体解剖を用いており、若年者を含めた報告は少ない。本研究の目的は、若年者を含めた肩甲切痕の形態を 3DCT を用いて調査し、肩甲切痕形態のバリエーションとの関連を調査することである。

【対象と方法】肩関節周囲疾患で 3DCT を撮影した 762 肩を対象とした。男性 404 肩、女性 358 肩で平均年齢は 58.2 ± 19.1 歳であった。肩甲切痕の形態は、Rengachary の報告に準じ、その分布、年齢および男女比との関連を調査した。

【結果】各形態の割合は、Type I:11.4%、Type II:23.5%、Type III:30.1%、Type IV:14.8%、Type V:15.9%、および Type VI:4.3%であった。各形態の平均年齢は、Type I: 56.5 ± 20.5 歳、Type II: 57.0 ± 19.5 歳、Type III: 55.5 ± 20.0 歳、Type IV: 56.4 ± 18.5 歳、Type V: 65.5 ± 14.4 歳、および Type VI: 68.0 ± 13.4 歳であった。Type I-IV と Type V、Type I-IV と Type VI で有意差を認めた。非骨化群(Type I, II, III, IV)と骨化群(Type V, VI)では非骨化群の平均年齢は 56.2 ± 19.6 歳、骨化群の平均年齢は 66.0 ± 14.2 歳であり、両群間に有意差を認めた。

【考察】上肩甲横靭帯骨化の報告は、1979 年以後散見され、加齢との関係が示唆されているが、屍体を用いた報告がほとんどあり、加齢との関係は明確ではない。今回我々の若年者を含む 3DCT での研究では、骨化と加齢との関係性が認められ、Type I, II, III, IV の違いは個体差であると考えられた。

【結語】肩甲切痕の形態について 3DCT を用い、Rengachary の分類を用いて調査した。上肩甲横靭帯の骨化は約 20%に存在し、骨化と加齢との関係性が認められた。肩甲切痕の形態は骨化を含め様々であり、上肩甲横靭帯切離術前に 3DCT で評価することは安全に手術を行う上で重要である。